

## 大庭柯公とバーナード・ペアズのロシア軍従軍取材 ：日英におけるロシア研究の交差点としての第一 次世界大戦

松枝, 佳奈

<https://hdl.handle.net/2324/7173562>

---

出版情報 : Interdisciplinary cultural studies. 21, pp.119-140, 2016-10-31. The Japan Society of Mechanical Engineers

バージョン :

権利関係 :



## 大庭柯公とバーナード・ペアズのロシア軍従軍取材

—日英におけるロシア研究の交差点としての第一次世界大戦

Како Оба и Бернард Пэрс в русской армии:

Первая мировая война как перекресток японской и британской россики

松枝 佳奈

MATSUEDA, Kana

第一次世界大戦(1914-1918年)初期に、20世紀初頭の日英を代表するロシア研究者、大庭柯公(本名:大庭景秋、1872-1922年頃)とバーナード・ペアズ(Bernard Pares, 1867-1949)が東部戦線<sup>1</sup>のロシア軍に従軍し、両者ともその取材に基づく優れたルポルタージュを残していたという事実は、現在ほとんど知られていない。ペアズはイギリスのロシア研究の蓄積や、豊富なロシア滞在経験と英露協商成立後の両国の友好関係の下で築かれた人脈を活かしつつ、ロシア軍や戦場に関する旺盛な取材を行った。一方、大庭はロシアの諸都市や村落の様子、帝国の支配下にある諸民族の生活、ロシア軍の戦況を初めて目の当たりにした。その成果として著された大庭の従軍記は、戦争自体の取材記録としては未成熟でありながら、日本における本格的なロシア研究の萌芽を示すものであった。大庭の従軍記は、さまざまなロシア事情の知識や情報と実体験が複合したロシア人論・ロシア文化論が日本にも登場した事象として評価に値する。このようなロシア研究はすでにイギリスで実践されていたものであり、その点においてロシアからの帰国後に大庭が先導した日本のロシア研究は、イギリスのロシア研究の潮流の中にあった。本論では、大庭とペアズを含む東部戦線のロシア軍に従軍した全11名の記者たちに関する新たな資料やテキストを提示しつつ、大庭とペアズの従軍ルポルタージュの分析や比較を通じて、それらの特徴や、彼らのロシア観とその後のロシア研究との関連性、そして日本とイギリスにおけるロシア研究が交差した地点としての第一次世界大戦が持つ重要性について考察してみたい。なお、本論における外国語テキストの翻訳はすべて引用者による。

1 ドイツおよびオーストリア=ハンガリー帝国とロシア帝国の国境地域の戦線のことで、現在のベラルーシやウクライナ、ポーランド南東部にまたがる地域で展開された諸戦線を指す。東部戦線の中心は、1772年に始まるポーランド分割でオーストリア領となった地域、ガリツィアであり、その主な居住民族はポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人で(野村真理『隣人が敵国人になる日——第一次世界大戦と東中欧の諸民族』(人文書院、2013年)、16頁)、民族構成がきわめて複雑であった。1914年夏から1915年末までの開戦当初、ドイツ・オーストリア=ハンガリーの連合軍とロシア軍の間で激戦が繰り広げられた。

## 1. 大庭柯公とバーナード・ペアズ——第一次世界大戦・東部戦線取材した二人のロシア研究者

大庭柯公とロシア軍従軍——近代日本におけるロシア研究の観点から  
明治・大正期にロシア語と同国の事情に精通し、ジャーナリスト・評論家・文筆家として活躍した大庭は、1914年秋から1915年

2 大庭柯公「露軍従軍記(一)~(廿八)」、『東京朝日新聞』朝刊、1914年12月4日~1915年4月13日、全て3面。

3 晩年の大庭柯公によるロシア研究については、拙稿「大庭柯公と雑誌『露西亜評論』——1917年以後の日本におけるロシア研究のゆくえ』、『ロシア語ロシア文学研究』46号(2014年10月)、19-36頁を参照。大庭の代表的著作『露西亜に遊びて』(大阪屋號書店、1917年)が出版され、雑誌『露西亜評論』で活動した1917年から1920年は、大庭がロシア研究者として最も活躍した時期であった。なお大庭は1921年に革命後のロシアに入国後、当局による逮捕と拘禁を経て釈放されたが、1922年以降、現在まで消息不明である。1992年にロシア政府より名誉回復を受けた。

4 外川継男「昇曙夢とロシアをめぐって(一)」、『えらみ』14号(1985年12月)、67-69頁。

5 拙稿「ロシア研究者・二葉亭四迷の実像——大庭柯公との関係を手がかりに」、『比較文学』55巻(2013年3月)、48-61頁。

春まで、『東京朝日新聞』在ペトログラード特派員として第一次世界大戦開戦直後のロシアに滞在した。特筆すべき点は、大庭が特派中の1914年10月初旬から同年11月初旬までの約一か月間、日本人として初めて東部戦線のロシア軍に従軍し、戦場となった都市や村落、ロシア軍陣営を取材したことである。大庭は1914年冬から翌年1915年春まで、『東京朝日新聞』に従軍ルポルタージュ「露軍従軍記」(全28回)を連載し<sup>2</sup>、それを『露西亜の戦線より』(富山房、1915年)に集成して出版した。『露西亜の戦線より』は取材体験を記した単なる従軍記ではなく、現地の観察に基づく良質なロシア人論・ロシア文化論であり、本書によって日本において本格的なロシア研究書が出版される端緒が開かれたと考えられる。何よりもロシア軍従軍記者の体験こそが晩年の大庭のロシア研究の出発点となったといつてよい<sup>3</sup>。大庭は1914年以前からすでにロシア事情の調査・研究に着手していたが、ロシア帝国の首都ペトログラードと戦地に滞在し、ロシアの実態とそこに生きる国民や諸民族の姿を目の当たりにしたのは初めてのことであった。従来持ち合わせていたロシア事情の知識や情報に実体験が伴った結果、大庭は従軍記者という枠を越えた書き手、すなわち日本を代表するロシア研究者としての自覚を持った書き手になった。大庭は一方でロシアや欧米の特派員や軍関係者、現地の住民たちに絶えず日本の存在をアピールし、他方ではロシア帝国領の各地方の風土や人々の生活、ロシアの日本に対する関心や友好的な態度を、新聞読者をはじめ日本社会に報道し広く紹介したのであった。

近代日本には「地域研究」ともいべきロシア研究が存在していた。その特徴は文学や芸術のみならず、政治や軍事、歴史、地理、思想、社会、フォークロア、民族までを射程に入れ、人文科学と社会科学を越境してロシアを総体的に捉えた点にある<sup>4</sup>。この時期のロシア研究において、現在は専ら小説家やロシア文学の翻訳家としてのみ評価されている二葉亭四迷(本名：長谷川辰之助、1864-1909)こそが最も重要な存在であった。そして二葉亭と共に対露の貿易やロシア事情研究を企てた同志的な友人であった大庭は、二葉亭の正当な後継者、すなわち有能な地域研究者でありながら優れた文学者であり、第一次世界大戦後には二葉亭よりもさらに成熟したロシア研究の担い手となったのである<sup>5</sup>。

## ペアズとロシア軍従軍——イギリスのロシア研究とその特徴から

二葉亭や大庭のように文学者やジャーナリストの側面を持ちながら、人文科学と社会科学にわたるロシア事情研究に従事した研究者は、明治・大正期の日本に先駆けて、実はすでに19世紀後半以降のイギリスやフランス、アメリカに複数存在していた。とりわけイ

ギリスのロシア研究は当時最も進んでおり、代表的なロシア研究者として、『タイムズ (*The Times*)』紙外国特派員のドナルド・マッケンジー・ウォレス (Donald Mackenzie Wallace, 1841-1919)<sup>6</sup>、戯曲家・詩人・小説家・翻訳家のほか軍事特派員としても活躍した文学者、モーリス・ベアリング (Maurice Baring, 1874-1945)<sup>7</sup>、リヴァプール大学やロンドン大学でロシア語・ロシア史・ロシア文学を講じ、両大学にスラヴ・東欧研究科を創設したバーナード・ペアズ<sup>8</sup>らが挙げられる。

欧米の英露関係史研究では、マッケンジー・ウォレスやペアズのようなロシア研究者の活動が19世紀後半から20世紀初頭の英露の友好関係に与えた影響について限定的ではあるが考察が試みられ<sup>9</sup>、ロシアの英露関係史研究においても、この時代のイギリスにおけるロシア研究とそれに従事した人物たちに関する包括的な研究が存在する<sup>10</sup>。彼らのロシア研究書の詳細なテキストの分析を含めたイギリスや欧米諸国におけるロシア研究の全体像の解明やその意義の検討については今後さらなる研究が待たれるが<sup>11</sup>、イギリスにおけるロシア研究およびその研究者の特徴は差し当たり以下の四点に整理できる。第一に、1907年に成立した英露協商に基づく帝国主義的な利害調整とドイツへの対抗意識の上に結ばれたイギリスとロシアの友好関係の下、イギリスではロシア事情の研究が歓迎された。特に代表的な研究者の多くは同国の王室や政府と深い関係を持ちつつ支援を受けており、それはマッケンジー・ウォレスがロイヤル・ヴィクトリア勲章ナイト・コマンダー (KCVO) を、ベアリングが大英帝国勲章オフィサー (OBE) を、ペアズが同勲章ナイト・コマンダー (KBE) をそれぞれ授与されていることからもうかがわれる。またペアズはイギリスとロシアの貿易促進に携わる露英商業会議所 (Russo-British Chamber of Commerce) 委員会のメンバーでもあり<sup>12</sup>、対露関係をより良好なものとするためにイギリス王室・政府と積極的な協力関係にあった。第二に、多くのロシア研究者は高等教育を受けており、その後新聞社や報道機関、大学などに所属しながら、年単位の長期にわたるロシア滞在を複数回行うなど、比較的安定した地位に就いて調査・研究に従事していた。前述のマッケンジー・ウォレスやペアズは無論のこと、ベアリングも『ロンドン・モーニング・ポスト (*London Morning Post*)』紙特派員を務め、イギリス陸軍航空隊 (Royal Flying Corp) にも入隊している。その他、同じくイギリスでロシア研究者として活躍したエミール・ジョセフ・ディロン (Emile Joseph Dillion, 1854-1933) は1887年から1914年にかけて『デイリー・テレグラフ (*The Daily Telegraph*)』紙の在ロシア特派員として活躍しつつ、当時はロシア帝国領にあったハリコフ大学 (現ウクライナのハルキウ大学) で教鞭も執った<sup>13</sup>。

6 Donald Mackenzie Wallace, *Russia* (London: Cassel & Company, 1877) が、代表的なロシア研究の著作として挙げられる。

7 代表的なロシア研究として、Maurice Baring, *The Russian People* (London: Methuen & Co. Ltd, 1911)のほか、多数の著作が存在する。

8 Bernard Pares, *A History of Russia*. (New York: A. A. Knopf, 1926) は、改訂・増補・再版が繰り返され、20世紀の欧米における代表的なロシア史研究書として高く評価されている。また1912年から1914年にかけてペアズが、ロシアの歴史や政治、経済、文学など多岐にわたるロシア事情を扱った総合雑誌 *The Russian Review* を編集・発行していたことは注目すべきである。現在はリプリント版の *The Russian Review: A Quarterly Review of Russian History, Politics, Economics, and Literature* (Nendeln: Kraus Reprint, 1979) が一次資料として最もアクセスしやすい。

9 代表的な先行研究として、Douglas G. Morren, 'Donald Mackenzie Wallace and British Russophilism, 1870-1919', *Canadian Slavonic Papers* 9(2) (1967), pp. 170-183や、Hughes, Michael. *Bernard Pares, Russian Studies and the Promotion of Anglo-Russian Friendship, 1907-1914*. *Slavonic and East European Review*, 78 (3) (2000), pp. 510-535が挙げられる。

10 А. Н. Зашинкин. Британская Россия: второй половины XIX - начала XX века. Поморский гос. ун-т им. М. В. Ломоносова. Архангельск: Изда-во «Солти», 2008.

11 ただし外川掲揚論文、83-89頁および外川継男「昇曙夢

とロシアをめぐって(二)——英書の翻訳について、『えらみ』15号(1986年12月)、79-86頁では、ベアリングらイギリスやその他の欧米のロシア研究に言及されており、両者は19世紀から20世紀初頭の欧米におけるロシア研究と近代日本のロシア研究の関係の考察を試みた日本で唯一の先行研究として評価できる。

12 Bernard Pares, *Day by Day with the Russian Army 1914-15* (London: Constable & Company Ltd., 1915), p. 11. RBCCはイギリス王室の支援や協力を受け、1916年に設立された。

13 代表的なロシア研究書として、Emile Joseph Dillon, *The Eclipse of Russia* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1918)が挙げられる。

14 Pares, *Day by Day with the Russian Army*, p. 1.

15 その他、19世紀ロシア文学の翻訳家として活躍したコンスタンス・ガーネット(Constance Garnett, 1861-1946)もイギリスに亡命したロシア人革命家のセルゲイ・ステプニャーク=クラフチンスキー(Сергей Степняк-Кравчинский, 1851-1895)らと交流し、初期の訳業で助力を得ていた。

16 Pares, *Day by Day with the Russian Army*, p. xi.

第三に、ロシア研究者たちはイギリスに亡命・移住・滞在したロシア人貴族・知識人(革命家を含む)やポーランド出身の革命家たちと交友関係を深めつつ、ロシア事情の調査・研究やロシア文学の翻訳紹介にあたっては多くの助言や支援を受けていた。例えばペアズは1914年の第一次世界大戦開戦前、ロンドンで自由主義的なロシア人政治評論家のプロトボポフの訪問を、その後ポーランド独立運動の指導者であったドモフスキの訪問を受けており、両者とも「以前から戦争の勃発を予想していたが、それが切迫しているかどうかは分からない」と語っていたという<sup>14</sup>。多くのロシア研究者たちが自らの著書の謝辞に複数の在英ロシア人たちの名を記しており、彼らの間に浅からぬ交流が存在していたことがうかがえる<sup>15</sup>。第四に、イギリスのロシア研究ではロシアでの滞在や調査旅行に基づく観察が重要視されており、その内容はロシアの地理や歴史、民族の特徴の紹介や解説を基礎としながら、同国の政治や外交、軍事、経済、社会事情、思想、さらに文学や文化に関する知識や情報を網羅し、それらからロシア人の国民性や民族性を考察するというものである。特にマッケンジー・ウォレスとベアリングの著作はこのような性質を備えたロシア研究書の筆頭として評価に値する。

管見の限り、上記の三番目と四番目の特徴が見られる近代日本のロシア研究は、同時代のイギリスのロシア研究の系譜に連なるものであったと推定される。しかし二葉亭四迷や大庭柯公のようにロシア語を習得しロシア研究に携わった日本人の多くは大学などで高等教育を受けていなかったため、政策に直接影響をおよぼしうる政治家や官僚として活躍することはなかった。その上、彼らは基本的には反政府・反権力の立場を取りつづけた在野の文学者やジャーナリストであり、日本の政府や権力の中枢からは遠い存在であった。したがって日本のロシア研究者たちが、イギリスの事例のようにロシアとの親善のために政府と緊密に提携することはほぼ皆無であったのである。

大庭柯公が同行した1914年秋の東部戦線のロシア軍従軍には、6名のロシア人従軍記者を含む10名の外国人記者たちが参加しており、先述のイギリス人ロシア研究者、バーナード・ペアズもそのメンバーの一人であった。この事実は日本ではあまり知られていない。のちに日本のロシア研究を牽引することとなる大庭は、実は1914年の時点でイギリスを代表するロシア研究者に出会っていたのである。ペアズは『リヴァプール・デイリー・ポスト・アンド・マーキュリー(Liverpool Daily Post and Mercury)』紙に、1914年9月のロシア入国後から東部戦線における従軍までの日記を連載し<sup>16</sup>、その記事をはじめとする1914年から1915年5月までのロン

ア軍従軍のルポルタージュを集成した『ロシア軍との日々：1914-15年 (Day by Day with the Russian Army 1914-15)』を1915年にイギリスで出版した<sup>17</sup>。もっとも当時の大庭は「我通信団中英国新聞界の代表者たるベルス博士<sup>18</sup>」と記すなど、ペアズがロシア研究の第一人者であったことを認識していなかったと推定される。大庭やペアズのような従軍記者たちの活動に言及した第一次世界大戦史研究はほとんど存在せず、第一次世界大戦期の文学・ルポルタージュ作品に関する先行研究においても、この戦争を題材としたドイツやフランスの文学作品を除けば<sup>19</sup>、研究対象として取り上げられることがほとんどないのが現状である。そのため大庭やペアズなど東部戦線のロシア軍に従軍した記者たちによる一定の速報性を持ったルポルタージュはその存在自体が顧みられることはなく、内容やそれらもたらした成果についても検討されていない。近年、大庭柯公の「露軍従軍記」および『露西亜の戦線より』について第一次世界大戦と日本文学の関係や戦争報道とマスメディアの関係という観点から言及した研究が現れたが、分析に費やされた紙幅が少ないためか、考察にやや不十分な点があり、大庭のテキストの特徴を完全に捉え切れているとは言いがたく<sup>20</sup>、さらに詳細なテキストの検討が求められるであろう。

## 2. 「従軍記者」とロシア帝国

### 東部戦線従軍記者団のロシア人たちと大庭・ペアズの関係

ペアズは1914年10月10日の日記に以下のように記している。「我々の小さな一行には、ロシアの主要紙の大半から特派された数名の名高いロシア人ジャーナリストたちや、フランスやアメリカ、そして日本の著名な報道機関の代表者たちが含まれていた」<sup>21</sup>。

1914年10月から11月にかけて東部戦線のロシア軍に従軍した従軍記者団は、大庭とペアズを含めて総勢11名、その内訳はロシア国内から6名、フランスから1名、イギリスから2名、アメリカから1名、日本から1名であった(表1)。

17 ペアズの著書には大庭に関する目立った記述は見当たらない。

18 大庭景秋『露西亜の戦線より』(富山房、1915年)、35頁。大庭はロシア人従軍記者たちの発音からペアズという姓を「ベルス」として理解していた可能性が高い。

19 ドイツ軍志願兵の青年が西部戦線の戦場で恐怖や苦悩を味わい戦死するまでを描いた、エリッヒ・マリア・レマルク(Erich Maria Remarque, 1898-1970)の長編小説『西部戦線異状なし(Im Westen nichts Neues)』(1929年)やカール・クラウス(Karl Kraus, 1874-1936)の実験的な風刺記録劇『人類最後の日々(Die letzten Tage der Menschheit)』(1918-1919年)、ゴンクール賞を受賞した、アンリ・バルビュス(Henri Barbusse, 1873-1935)の反戦小説『砲火(Le Feu)』(1916年)などが挙げられる。

20 中山弘明『第一次大戦の〈影〉——世界戦争と日本文学』(新曜社、2012年)、106-110頁。

21 Pares, *Day by Day with the Russian Army*, p. 17.

表1 ロシア軍従軍記者メンバー一覧表(第一次世界大戦・東部戦線(1914.10-11)、大庭柯公を除く、松枝佳奈作成)

	名前(生没年)	国籍	所属/連載記事数(連載時期)	職業	言語	来日経験	日露戦争従軍
1	ワシーリー・イワーノヴィチ・ネミローヴィチ=ダンチェンコ (Василий Иванович Немирович-Данченко, 1845-1933)	ロシア	『ルースコエ・スローヴォ』 (Русское слово) (モスクワの自由主義系日刊紙) 全13記事 (1914年10月16日~11月14日)	作家・従軍記者 (五回の戦地特派経験) (モスクワ芸術座創設者・ウラジーミル・ネミローヴィチ=ダンチェンコ) (Владимир Иванович Немирович-Данченко (1858-1943)の兄)	露・仏・独	○	○
2	アレクサンドル・ミトロファンノヴィチ・フォードロフ (Александр Митрофанович Федоров, 1868-1949)	ロシア	『レーチ』(Речи) (ペトログラードの立憲民主党(カデット)日刊機関紙) 全17記事 (1914年10月15日~11月22日)	作家・戯曲家 (アジア・アラビア事情に精通)	露・仏・独	○	なし
3	セルゲイ・ニコラエヴィチ・スィロミャチニコフ (Сергей Николаевич Сыромятников, 1860年生、没年不詳)	ロシア	『官報』 (Правительственный вестник) (政府系日刊紙) 全5記事 (1914年10月24日~11月11日)	ジャーナリスト	露	○	○
4	ニコライ・イワーノヴィチ・クラフチェンコ (Николай Иванович Кравченко, 1867-1941)	ロシア	『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』 (Новое время) (ペトログラードの保守系日刊紙) 全4記事 (1914年10月21日~1月13日)	画家・写真家・美術ジャーナリスト・従軍記者	露・仏・独	○	○
5	コンスタンチン・マルコヴィチ・シュームスキー (Константин Маркович Шумский, 1876-1938)	ロシア	『ビルジェヴィヤ・ヴェードモスチ』 (Биржевые ведомости) (経済問題を多く扱う日刊紙) 全10記事 (1914年10月19日~11月10日)	歩兵中佐・軍事ジャーナリスト	露	○	○
6	ペリスキー	ロシア	不明	ジャーナリスト	露	なし	なし
7	リュドヴィク・シャルル・ノドー (Ludovic Charles Naudeau, 1872-1949)	フランス	『ル・マタン』紙( <i>Le Matin</i> ) 『ル・ジュールナル』紙( <i>Le journal</i> )	ジャーナリスト	仏のみ	○	○
8	バーナード・ペアズ (Sir Bernard Pares, 1867-1949)	イギリス	『リヴァプール・ポスト・アンド・マーキュリー』紙 ( <i>Liverpool Post and Mercury</i> )	リヴァプール大学教授 (ロシア史家、ロシア文学者)	英	なし	なし
9	ミューズ	イギリス	『グラフィック』誌 ( <i>The Graphic</i> )	写真家	英・独	なし	なし
10	ウォッシュバーン	アメリカ	『タイムズ』紙( <i>The Times</i> ) 『ニューヨーク・サン』紙 ( <i>The New York Sun</i> )	ジャーナリスト	英・独	○	○

大庭柯公とバーナード・ペアズのロシア軍従軍取材(松枝佳奈)

この中に日露戦争などにも従軍した有名なフランス人ジャーナリスト、リュドヴィク・ノドーがいたことは注目に値するが、ここでは作家のワシーリー・ネミローヴィチ＝ダンチェンコ、作家・戯曲家のアレクサンドル・フォードロフ、ジャーナリストのセルゲイ・スィロミヤートニコフ、画家・写真家・美術ジャーナリストのニコライ・クラフチェンコ、歩兵中佐で軍事ジャーナリストとして活躍したコンスタンチン・シュームスキーの計五名のロシア人特派員たちについて言及しておきたい。2014年10月から2015年6月にかけてモスクワのロシア国立図書館および同館新聞部、ならびにサンクトペテルブルクのロシア国立図書館において調査を行った結果、上記五名の氏名ならびに経歴を特定し、彼らが執筆した新聞掲載もしくは単行本として刊行された従軍ルポルタージュの存在を新たに確認した。これらは従来の第一次世界大戦史研究や第一次世界大戦期の文学・ルポルタージュ作品の研究、大庭柯公関連の研究、日露文化交渉史研究において認識されていない。いずれの人物も1917年の第二次ロシア革命後に外国に亡命したことなどで、ソ連時代には忘却され、現在もおロシア文学・文化研究では取り上げられることが少ないが、政治思想としては自由主義や穏健な社会改良主義、議会制民主主義、立憲君主制を掲げ、革命前のペテルブルクやモスクワの新聞・出版界や文壇、芸術文化の分野などで活躍した著名な知識人たちであった。さらに驚くべきことに、彼らの多くが日露戦争への従軍経験や来日経験を有し、何らかの日本体験を得ていたのである。短期間であったとはいえ、このような人物たちと面識を得て交流した日本人は当時大庭をおいて他に存在しなかったと考えられる。

大庭は戦場に向かう列車の中で外国人従軍記者たちと談笑し、彼らの多くが多少なりとも日本と関わりがあったことに大きな喜びを覚え、以下のように記している。「(前略)七名が皆浅からざる縁故を我国に有する人たるは、独り予が一行中に在りて知己の感多きのみならず、亦実に我日本が如何に世界の立言家の間に知己を有するかを知り得るに於て予は真に感涙なきを得ざりき<sup>22</sup>。」日本の名声が世界に知れ渡っていることに対して一人の日本人として純粋に驚き、その感慨は一入であった。大庭はこの国際色豊かな従軍記者団の一員として過ごすことで、政府当局や特権階級にはない、知的でありながら友好的かつ自由闊達な気質を持つ新聞記者としての気高い誇りを感じていた<sup>23</sup>。大庭が抱いたこのような印象が従軍記者たちの間で概ね共通していたことは、ロシア人特派員フォードロフとクラフチェンコによる以下のルポルタージュからもうかがい知ることができる。フォードロフは列車内の従軍記者たちの様子をこのように描写した。

22 大庭前掲書、35頁。

23 同上、35-36頁。

24 Федоров А. М. С войны: Очерки. М.: Московское книгоиздательство. 1915. С. 80-81. (Федоров А. Отражения (От нашего специального корреспондента) // Речь. №.265 (2934). 2(15) октября 1914 г. С. 1.)

25 Кравченко Н. В вагоне. (Корреспонденция «Нового Времени») // Новое время. № 13866. 18-го (30-го) октября 1914 г. С. 3.

26 Там же.

27 大庭前掲書、45頁。

28 Федоров. Указ. соч., С. 80.

外国人たちはやや離れたところに座っていたが、それによって我々が打ち解けるのに妨げとなることは少しもなかった。どうにかしてすぐに仲睦まじい、親しみのこもった調子となり、——そして私たちはまったく気づかないうちに、こんな風にしていつの間にかヴィルノ(引用者注：現リトアニアの首都、ヴィリニウス)に到着したのである<sup>24</sup>。

クラフチェンコが従軍記者団に抱いた印象もフォードロフのそれときわめて近いが、第一次世界大戦期の対ドイツ・オーストリアの包囲網で団結した英露米仏日の五大国の良好な関係を従軍ジャーナリストたちのそれに投影するかのよう表現し、自らの従軍通信の連載先で当時のロシアで人気を博していた保守系日刊紙『ノーヴォエ・ヴレーミャ(Новое время)』紙の読者に従軍記者団の友好的な雰囲気アピールしていたといえる。

このような軍事通信員たちの一風変わった旅路は、平時にあっても想像することすら難しいような心地よさに彩られ、総じてとても興味深く、それを通じて私たちロシア人特派員たちは、今回アメリカ、イギリス、フランス、そして日本という四大国を代表する、好感の持てるジャーナリストたちと親しくなった<sup>25</sup>。

ロシア人記者たちは共に従軍した日本人の大庭に対してどのような印象を抱いたのであろうか。今回の調査により、従軍ルポルタージュで大庭に言及していることが判明したのは、先に触れたフォードロフとクラフチェンコである。クラフチェンコは従軍記者団が乗る二等列車の寝台で毛皮のコートにくるまってうつ伏せで寝る大庭の姿を記録するに留まったが<sup>26</sup>、フォードロフは、大庭が自らのルポルタージュの中で「全旅行中の好伴侶<sup>27</sup>」と明かした通り、従軍中最も多く時間を共に過ごし、大庭のさまざまな姿や言動について書き残している。「典型的な小柄な体つきで、身のこなしは整然と落ち着いており、小さな黒い瞳の持つまなざしは鋭く注意深い<sup>28</sup>。」フォードロフはこのように大庭の身体的特徴や外見について事細かく記すなど、大庭に対して強い好奇と好意のまなざしを向け、大庭から日本文化や歴史に関する知識や意見などを多く得ていた。フォードロフはガリツィアに向かう途中で訪れたヴィルノでの大庭との逸話をも自らのルポルタージュで披露している。

私は仲間の日本人(引用者注：大庭柯公)と共に市内を見物に出かけたのだが、彼はまったくすらすらとロシア語を読み、

ロシア語で対話するのも下手ではないのである。(中略)私の連れ合いはこれらの印象(引用者注：ロシア皇帝ニコライ二世がヴィルノを訪問し、市中がロシア国旗で埋めつくされ、歓迎と愛国心の高揚が見られる街の様子から受けた印象)にも、いにしえからの神聖な宝物——「夜明けの門」の聖母の聖像画——をいただく古都にも、城砦の丘に続くいくつもの曲がりくねった小さな通りにも大喜びであった。彼は心をこめて自分の財布にヴィルノにはびこる貧困の証として銅銭——半コペイカ——を置いた。

「このちっちゃな硬貨で一体何を買えるんでしょうか。」と彼は私に問う。

「パン一切れだね。」

日本人はしばしの間考え込んだあと、あらゆる日本人たちと同じように「l」の代わりに「r」を発音しつつ、しみじみと恥ずかしそうに微笑みを浮かべながら、こう言った。

「戦争のあと、ロシアの民衆がこのような硬貨がなくて困ってしまわないよう願っています。」<sup>29</sup>

以上のようなフォードロフの記述は、大庭の行動や気質、ロシア語運用能力などをより客観的に知る手がかりとなるに相違なく、大庭柯公に関するロシア語の一次資料として重要である。フォードロフの眼には、発音は不明瞭ながらもロシア語でしっかりと対話し、見聞するあらゆるものに関心や喜びを示し、戦争そのものよりもロシアの民衆の将来を案じる大庭の姿が映じていたのである。大庭の態度や気質がロシア人たちにも受け入れられたためか、大庭の記述によれば、「特に秋漸く老けて万樹の黄葉せる様は恰然日本の秋色にしてダンチェンコ老は飄君(引用者注：ロシア人従軍記者のフォードロフ)共に予を顧みて日本の紅葉季節を賞し「もみぢ」の名称さへ記憶より呼びて秋の日本を追懐すること頻なり<sup>30</sup>)とネミローヴィチ＝ダンチェンコやフォードロフらと日本の風景や名勝、秋の木々の紅葉などについて日本語の単語を交えながらロシア語で語り合うなどきわめて友好的に交流していた。

クラフチェンコは先述の通り、大庭に関してはきわめて限定的にしか記述しなかったが、その一方でイギリスのペアズとは親密になり、ロシア研究者としての能力を高く評価しながら、親しみをこめながらその個性的な人格について、以下のように詳述している。

リヴァプール大学教授で、素晴らしい講義を行っているというペルス(引用者注：「ペアズ(Pares)」のロシア語表記)氏は鋭い観察眼で群を抜いており、どんな学者にもつきものである

29 Там же. С. 81.

30 大庭前掲書、112頁。

31 Кравченко. Указ. соч.

32 Там же.

33 中山「第一次大戦の〈影〉」、108頁。

発音の不明瞭さはあるものの、かなり流暢にロシア語を話すので、彼との会話はつねにどこか興味深いものであった。彼はいつも革製のズボンと同じ革のジャケットを着ていて、いつもどこか(特に野戦病院)を視察しており、あるときは客車から出ようとして自分のすべての鞆と双眼鏡をぶら下げた挙げ句、ついでに私の双眼鏡まで持って行ってしまふほどそそっかしいのである。そして決してそれを私に返そうとしなかった<sup>31</sup>。

クラフチェンコに、「優秀であるがやや頑固で注意散漫」であると評されたペアズは、ロシアでナンキンムシが大量に発生することを聞きつけると、ブリキ罐に入っていた殺虫剤の粉をすべて自分の荷物と寝台、さらに隣の寝台にまでまき散らしたという<sup>32</sup>。なぜロシア人従軍記者たちは一見瑣末であるように思われる、大庭やペアズら外国人記者たちとの交流や彼らの言動に関する逸話を記したのであるか。ロシア国内の新聞読者の同盟国に対する関心が高まっていたため、彼らが読者への娯楽の提供の一環としてこのような記述を行ったと推測される。だが一方でそれは取材や報道の規制・検閲をめぐるロシア帝国とロシア人・外国人記者たちの緊張関係を示唆するものでもあったと考えられる。すなわち従軍記者たちは「外国人記者たちとの友好的な交流」という穏便な話題を取り上げることで、戦況報道をめぐる当局の監視や検閲から逃れようとしたのである。「従軍記者」がロシア帝国にとってどのような意味を持っていたのか、以下、大庭やペアズが記した記述に基づきながら考察を試みる。

#### ロシア帝国の思惑——大庭とペアズの従軍記・回想記を手がかりに

1914年8月末に露都ペトログラードに到着した大庭は予めからロシア軍従軍を強く望んでいたが、ロシアがイギリスなどの同盟国の新聞記者に対して従軍を全く許可していないと知り、その実現が困難な状況を悲観していた。そこで大庭は当時の駐露日本大使、本野一郎(1862-1918)の口添えを得て日本の外務省を経由してロシア外務省に従軍許可を願い出た。その結果、同年10月6日に従軍の許可が下り、8日午後1時、ペトログラード発の軍関係者・従軍記者専用の列車で東部戦線のガリツィア地方へ出発することになった。大庭はロシア軍従軍までこのように非常に煩雑な手続きを経ている。大庭がロシア軍への従軍を許可された理由について、先行研究では「柯公自身も薄々感づいていたとおおり、「露国当局者」の対外的な「新聞政策」に他ならなかったはずである。その意味で、柯公自身そうした政策に確実に組み込まれていたわけだ<sup>33</sup>」と推測されている。これを裏付けるテキストとして、従軍記者団が参謀本

部の置かれた列車の中で、皇帝ニコライ二世の従叔父にあたるロシア帝国軍最高司令官、ニコライ・ニコラエヴィチ大公(Николай Николаевич Младший, 1856-1929)に謁見した際の大庭とペアズの記述は注目に値するといえる。

大庭は威風を備えながら日尻に柔和さと愛嬌を湛えた偉丈夫の姿を称賛しながら、大公の言葉の概要を「新聞通信の戦時に必要なこと、軍隊と国民の連絡となりて、是等報道機関の必要な旨を語られ、只軍には機密の最も尊むべきものがあるが故に、其範圍を侵すべからざることなどを簡明に述べさせられ(後略)<sup>34</sup>」と記録している。一方のペアズはこの大公の発言の全てをそのまま英訳して再現している。以下、その重要な部分のみを引用する。

紳士諸君、私は諸君を我が総司令部に歓迎することを喜ばしく思っています。報道機関は、合法的で相応の管理の下において多大な貢献を行うことができると私は常に考えてきましたし、今もそう考えています。紳士諸君は新聞での報道で最も関心の高い内容をくまなく伝え、事実を正しく提示することで国民と我々の両方に利益をもたらしてくれるのに適任であると私は確信しています。残念ながらやむを得ず本来ならおそらく喜んで見せるべきもの全てを見せることはできません。いかなる戦争においても、特にこのように途方もなく巨大な戦争においては、戦略に関わる軍事機密を遵守し、それらを暴露する可能性のある内容を管理することは戦争に勝利するために必要な誓約なのです<sup>35</sup>。

大庭とペアズの記述は、従軍記者を一定の規制や支配の下で軍に帯同させているというロシア帝国の思惑を如実に示している。特にペアズの記録では、ロシア軍による「合法的で相応の管理の下」で「事実を正しく提示」し、国民とロシア軍の双方に不利益をもたらさないように報道することが、従軍記者たちに求められていたことがうかがえる。従軍記者と報道に関わるこのような大公の発言は、管見の限りロシア人従軍記者たちの記述には見られないことから、ロシア国内では伝えられていなかったと推測される。

さらにペアズは1931年に出版したロシアに関する回想記の中で、「十月初旬、「見せることができるもの」を視察することが許された、ジャーナリストと作家からなる奇妙な集団の中に私は入れられた。我々は特別な許可を与えられていると言われたが、実際は誤って見せられたものを除けば全く何も視察できなかつた<sup>36</sup>」と1914年秋当時の東部戦線の従軍を一記者として不服に感じていた状況を、皮肉を交えながら振り返っている。ロシア軍の様子や東部戦線の戦況を

34 大庭前掲書、60-61頁。

35 Pares, *Day by Day with the Russian Army*, p. 17-18.

36 Bernard Pares, *My Russian Memoirs*, London: Jonathan Cape, 1931, p. 276.

37 大庭前掲書、38頁。

38 同上、39頁。

国民に伝達する手段として新聞や通信などは不可欠であるとして記者たちの従軍は許可されたが、それはあくまでも軍が視察することを許した範囲での取材であった。それは彼らが戦況に関わる重大な内容や軍の機密に触れ、暴露したり示唆したりすることは全く認められなかったことを意味している。それを示す証拠として、大庭やペアズ、ロシア人たちの記述によれば、常に複数名の監視役の軍人（大庭の記述によれば、軍服姿の「外務省官僚」<sup>37)</sup>が彼らに同行し、行先を案内しており、記者たちは皆、その軍人たちを「保母」と呼んで揶揄していた。記者たちが列車内で雑談する中で、ロシア人記者のクラフチェンコが「我等一行に保母を附けたる点より想像すれば、一行は常に一団に為りて或は保母指定の場所を限りて見物するに過ぎざるやも知れず。期間も左程永からざるべきか<sup>38)</sup>」と発言し、記者たちもその見立てに納得した。つまり従軍記者団のメンバーは、ロシア軍によって視察の対象を大幅に制限され、半ば軍がロシア国民と同盟国に公表したい内容を取材するように強いられており、彼ら自身もそれに自覚的であったことがうかがえよう。ロシア帝国にとってロシア人と外国人を一堂に集めた従軍記者団は、不都合な戦況を隠蔽しながら、兵士やその他の軍務従事者の華々しい活躍や戦果、軍の優れた戦力などを対外的に誇示するための格好の手段であったことは否定できないのである。

### 3. 大庭従軍記『露西亞の戦線より』の特異性

#### ——ペアズらの従軍記との比較考察

#### ロシア人記者とペアズのラヴァ・ルスカにおける戦況の描写

大庭の従軍記には、他の従軍記者たちのルポルタージュには見られない、通常の従軍通信の枠を越えた大きな特徴があったと考えられる。ペアズと先に言及した五名のロシア人記者たちの従軍ルポルタージュのテキストと比較しながら分析することでそれについて明らかにしたい。膨大に存在する従軍ルポルタージュのうち、ユダヤ系住民が多く居住していたラヴァ・ルスカ（現在はウクライナ西部の都市、リヴィウの北西に位置するポーランドとの国境の町、ラヴァ・ルシカ）の町や戦跡について記されたテキストを取り上げる。

まず五名のロシア人従軍記者たちのテキストを取り上げる。ネミローヴィチ＝ダンチェンコは、ラヴァ・ルスカの会戦が繰り広げられた平原に立ち、そこに残された数々の弾痕や巨大な塹壕に文学者らしい豊かな想像力を発揮しながら、戦闘とその後の光景を描写した。「私たちは、戦闘そのものは目撃しなかったが、これらの痕跡を見るとその光景が容易に浮かびあがるのだ。戦場の陰鬱さ、戦死

者たちの共同墓地に漂うもの悲しき沈黙、人影なきゆえ吹き荒ぶ風の音……<sup>39</sup>。」語の選択がやや陳腐ではあるが、重々しい表現と語調はもの悲しさと恐ろしさが混在する風景を端的に、かつ臨場感をもって伝えている。ネミローヴィチ＝ダンチェンコの従軍ルポルタージュに見られる大きな特徴として、見聞きした風景や場面に必ず自らの感情や思考を反映させ、きわめて主観的に描写している点が挙げられる。同じ従軍通信の中で従軍看護婦の傷病兵に対する献身的な治療や看病を賞賛している。「この勇敢な女性たちは不屈さと献身さにおいて勇敢な兵士に匹敵するのである。(中略)どうか祖国よ、彼女たちのもの言わぬ偉業を忘ることなかれ、そして祖国の素晴らしき娘たちに遠くから感謝の声を上げよ<sup>40</sup>。」このように壮麗さをきわめた表現を伴う従軍看護婦の描写や記述は、五人のロシア人特派員のルポルタージュすべてに共通して見られ、ロシア国民の愛国心を鼓舞する要素として、ロシア軍が積極的に従軍記者たちに看護婦たちの業務を視察させたことも影響していると考えられる。

一方、フォードロフは、《Отражения》「反射」もしくは「反響」「反応」という新聞掲載ルポルタージュのタイトルにふさわしく、兵士や住民の生の声をそのまま鏡に映し出すかのように書き記し、実状をできる限り臨場感を保ちながら冷静に伝える観察者に徹しようと試みた。以下はフォードロフが出会った、オーストリア軍のスパイを探索する怪しげな男との会話とその顛末の描写である。戦闘のうち、地方諸都市の治安が乱れ、スパイ狩りや犯罪者が横行していたことをやや皮肉を利かせながらユーモラスに伝える描写である。

「旦那、巻きたばこはいかがですか？ とびきり上等のロシア製が有りました。」

私の前にいたのはロシア語が上手く、立派に着飾った人物だったが、かなりいかがわしい風貌である。

「どこから巻きたばこを手に入れたのですか。あなたはここの人ですか。」

「違いますよ、そんなわけではないでしょう。事情があってここにいるんです。」

「どんな事情なんですか。」

彼は秘密めかして私の方に体を傾け、ささやき声でこう説明するのである。

「スパイたちを捕まえているんですよ！」

「どんなスパイを。」

「オーストリアのスパイです。ここで変装した二人のオーストリアの将校が身を潜めていて、あちこち嗅ぎ回っているんで

39 *Немирович-Данченко*  
В. Телеграмма Вас. И.  
Немировича-Данченко //  
Русское слово. No.234. 11-го  
(24-го) октября 1914 г. С. 1.

40 Там же.

41 Федоров А. Отражения (От нашего специального корреспондента) // Речь. No.282 (2951). С. 2.

42 Сыромятников С. Н. От Львова до Владимира-Волынска. (От собственного корреспондента). Сарны, 9. X. 14 // Правительственный вестник. No.241. Понедельник, 13-го (26-го) октября. 1914. С. 2.

す。」

(中略)

「そうしたら(引用者注：スパイたちを見つけたら)彼らは縛り首になって、私はお褒めにあずかるでしょう。ところで巻きたばこのことですが、お一つ持っていかれませんか。」

「いいえ、ありがたいのですが、結構です。」

私たちに同行していた大佐が会話に関心を示し、この見知らぬ男に身分証明を求めて、おそらく何かとても感銘を与えるようなことを言い聞かせたので(引用者注：脅しつけたことの婉曲表現)、その後「スパイ探し屋」はそそくさと立ち去ってしまった<sup>41</sup>。

著名なジャーナリストで日露戦争従軍にも従軍したスィロミヤートニコフは、政府系の『官報』から特派されたことも影響したためか、わずか五回の連載ながら、ロシア軍やその野戦病院が秩序立てられており、十分に機能していることを伝えた。いかに傷病兵が野戦病院で快適に過ごしているかが、設備や食事に関するきわめて具体的な記述によって強調されている。

ラヴァの大きな駅は焼け落ち、その周囲、道の左側には後送病院の美しいヘッセン式テントがいくつも配置され、それを通じてラヴァへ後送された傷病兵はすでに三千人を超えたのだが、開戦時から他の場所も合わせるとして四万人以上の傷病兵がいたのである。我々がここを訪れた際にはサン付近に約五百人の傷病兵がおり、ロシアへ移送された。中心に鑄物ストーブの入っている二重テントのおかげで傷病兵は温かく快適に過ごすことができる。有名な中央アジア問題の評論家である後送隊長のロゴフェト大佐はこの野戦病院に石油用の鉄樽で造られたボイラーと調理場を設置し、そこでは傷病兵のために味がよく栄養のあるひき割り入りスープが作られている。古い施設は手術室や薬局、包帯材料や食糧の倉庫として利用されていた。すべて経済的に簡素に行われていた<sup>42</sup>。

他方、クラフチェンコモスィロミヤートニコフと同じく傷病兵を観察するが、その観点は大きく異なっている。

ラヴァ・ルスカヤ(引用者注：ラヴァ・ルスカのロシア語表記)駅に停車中の車両に乗って座っている。隣の線路には遠方へ向かう傷病兵たちを乗せた列車が停まっている。藁が敷き詰められた床に横たわる重病兵たちや貨物用車両のドア口に座っ

て足を垂れ、看護婦たちと楽しげに会話に興じるごく軽傷の兵士たちがいる。銃弾が貫通した手首に、もぎ取られた数本の指などは、現代の戦争の状況においては、まったく取るに足りない傷である。軍医たちは前線からさほど離れていない場所に位置する野戦病院をそんな兵士たちでいっぱいにしたがらないのだ。応急処置の後、一日も寝かせておかず、遠方へ移送される。ここでは寝台は榴散弾の時限信管か薬莖に触れて重傷を負い体が不自由となった者や、銃弾が何発か食い込んだり、胸や腹部を貫通したりした者のために必要とされているのである。(中略)

読者諸君よ、覚えているだろうか。負傷兵たちが貨物列車で運ばれて、じかに(引用者注：貨物列車の中の)藁の上に寝かされるという情報によって、どれほどの不平不満が社会に呼び起こされたかを。遠くでとどろく砲声が聞こえ、何千もの傷病兵が見られるここでも、私はもう何日そのような列車を見ていることか<sup>43</sup>。

「銃弾が貫通した手首」や「もぎ取られた数本の指」、「榴散弾の時限信管か薬莖に触れて重傷を負い体が不自由となった者や、銃弾が食い込んだり、胸や腹部を貫通したりした者」と、あたかも写真を撮影したかのように、兵士たちの傷の状態を事細かに生々しく描写している点は画家や写真家として活動したクラフチェンコらしく大変特徴的である。野戦病院への収容が追いつかず、藁の上で治療が施される状況を叙情的に伝え、新聞読者にその惨状を力強く訴えかける様子は、先ほど挙げたネミローヴィチ＝ダンチェンコの表現手法、叙情性と主観性を重視する表現に近いといえる。

軍人・軍事ジャーナリストであったシュームスキーは、以上で考察した四名とは異なる視点を示している。

五日間におよぶりヴォフ停泊のあと、ラヴァ・ルスカヤ付近の大会戦が行われた戦場を視察するため出発した。そこはロシア軍が、国境を越えて侵入してきたオーストリア軍の部隊の側面と後方に、最後の決定的な攻撃を行った場所である。

我々の出発の日、オーストリア軍の傷病兵たちがリヴォフの野戦病院からロシアへ移送された。これはきわめて時宜を得たことである。このように一つの都市に勝利者たちと敗北者たちが居合わせているというのは、すでにあまりにも時宜を得ていないように思われる。(中略)最近ではオーストリア兵たちに対する処遇に対する行き過ぎた「人道性」によって、とりわけ個人への非難が引き起こされている<sup>44</sup>。

43 *Кравченко Н.* Рава Русская. (Корреспонденция «Нового Времени») // Новое время. № 13862. 14-го (27-го) октября 1914 г. С. 3.

44 *К. Шумский.* Из действующей армии. (От нашего специального военного корреспондента). От Львова до Равы Русской. Виржевые ведомости. №.14437. Четверг. 16-го (29-го) октября 1914 г. Вечерный выпуск. С. 1-2. (№14438. Пятница. 17-го (30-го) октября 1914 г. Утренний выпуск. С.7.)

シュームスキーは会戦の戦略に関する記述や説明、軍内部や捕虜に関する議論を行うなど、五名の中で最も軍事的に専門性の高い記事を提供している。軍事関係の知識と現場で得た情報や事実から、ロシア軍が優位に戦闘を展開するための戦略や問題点を提起しつづけていたといえよう。

東部戦線の従軍記者団としてほぼ同じ場所を視察していたジャーナリストたちの従軍ルポルタージュの内容は、負傷兵の描写など一定の共通点を持ちながらも、各人の職業や立場、関心、心理状況、記事の掲載媒体などによって、その視点や着眼点は非常に多岐にわたっており、大きな差違が生じていたことは明らかである。そして前章で検討した通り、ロシア軍によって従軍記者団の視察や取材の範囲が大幅に制限され、報道できる内容も限定的であったことを考慮すれば、そのメンバーとして特派されたロシアの作家や芸術家、ジャーナリスト、軍事ジャーナリストらの従軍ルポルタージュは必ずしも戦況や戦闘そのものについての単純な客観的事実の伝達ではなかった。それらに求められたのは、むしろ東部戦線の軍や現地住民、戦跡などに関するリアリティのある現場報告であり、戦線から遠く離れたロシアの都市部の読者の戦争に対する興味や感情に直接訴えかける装置としての役割であったのである。

ペアズも上述のロシア人記者たちと同様にラヴァ・ルスカでの取材内容を書き残した。ペアズはロシア事情に精通した研究者ではあったが、東部戦線においては従軍記者としての立場を貫き、戦況や負傷兵たちの様子を詳細に記すことに徹する。ラヴァ・ルスカでロシアの砲兵隊がドイツとオーストリアの連合軍に対して有利に戦闘を展開する様子が以下のように記述されている。

兵士たちの話からこの戦闘全体のいくつかの特徴が付け加えられるだろう。攻撃は初めから終わりまでロシア軍側から実行されており、兵員数が劣っている戦場においてできさそうである。ロシアの砲兵たちはこの上なく優れた精神が漲っており、部隊の中で最も自信に満ちあふれている。一部隊あたりの野戦砲の数は、ロシア側がドイツ側やオーストリア側よりも少ないのにも関わらずである。ロシア兵たちは進軍の命令が下されると、戦場からオーストリア軍を駆逐し、不屈の急襲で前進するつもりだと感じているのである。彼らは、オーストリア軍やドイツ軍は歩兵の兵力に訴える手だてをあまり講じていないと言う。ロシア兵たちは、そのうちの一人の表現を借りれば、敵のライフル銃の射撃は「少しも際立ったものではない」と悟っており、彼らが唯一注意を払っている部隊は重砲隊であるが、ロ

シアの野戦砲隊はすでに著しく優位に立っている。オーストリア軍の小隊は伐採した樹木を何度も繰り返し用いて、前進してくるロシア軍の中隊を速射砲に引きつけるのだが、それは時として致命的な任務となった。騎兵隊はこの戦闘では全く役に立っていないのである<sup>45</sup>。

45 Pares, *Day by Day with the Russian Army*, pp. 33-34.

46 *Ibid.*, p. 35.

ペアズは、ロシア軍の兵士たちへのインタビューのみならず、オーストリアとドイツの兵力や戦況も取材して両者を比較することで説得性を担保しつつ、ロシア兵が半ば無謀にも思われるほど勇猛果敢に振る舞い、命令に従って攻勢を強める様子を叙述している。その他、長期にわたる塹壕戦を堪え忍ぶロシア兵を観察し、その強い忍耐力に大いに驚くなど、できる限り戦場の兵士たちの生活に寄り添いながら取材を行った。そしてロシア軍やラヴァ・ルスカの住民の生活を把握した結果、「ロシアの生活すべてが戦争に向かって流れるように動いている<sup>46</sup>」と判断するに至る。ロシア軍とドイツ・オーストリアの連合軍が一進一退の攻防を繰り返すなど、混迷を深める戦況をつぶさに視察する中で、一か月余りの東部戦線従軍に飽き足らなかったペアズは、さらにロシア赤十字の部隊に加入し、1915年5月までガリツィアやポーランドの戦線で戦況や戦場における兵士たちの姿を克明に記し続けた。ペアズの残した『ロシア軍との日々：1914-15年』は、一人の「従軍記者」の視点から見た主観に基づくものであったことに疑う余地はないが、ネミローヴィチ＝ダンチェンコやクラフチェンコらのそれに見られる、読者の感情に激しく訴えかけるような一方的な主観性や劇的な表現が少ないことが特徴である。その一方で単なる無味乾燥な戦場報告に留まらず、兵士たちの戦場や野戦病院における興味深い逸話や都市や村落の生活の様子を、臨場感を保ちつつ巧緻な筆致で描写し、「従軍記」と称するにふさわしい。東部戦線そのものを記録した従軍ルポルタージュの中では、ペアズの著書を専門性と文学性の面で最も均整の取れた作品として再評価すべきであろう。

### 日本におけるロシア研究の萌芽としての大庭従軍記

一方の大庭は、この戦争や戦場となった都市の状況について、ペアズやロシア人記者とは異なる印象を抱いていたようである。東部戦線従軍から露都ペトログラードに戻った後、懇意になったロシア人の大学教授、アレクサンドル・ブランツ（Александр Андреевич Бранц, 1855-1933）に対して、当時の戦争に対するロシア社会の状況や市民の生活について持論をロシア語で披露した。大庭は帝都の生活が平時と変わらず、市民は誰も前線を案じていないことを指摘し、戦争を直視しないロシアが勝利することは難しいと論じ、ブラ

47 *Брандт А. Листья пожелтые: передуманное и пережитое.* Белград: Русская типография С. Филонова в Новом Саду. 1930. С. 86.

48 大庭前掲書、137-138頁。

ントを驚かせたという。そして東部戦線のロシア軍に従軍した経験から、地方都市や東部戦線の前線にあたるワルシャワの様子を語った。以下は今回の調査で存在が判明したブランドの回想録の一節である。

私が、そのようなこと(引用者注:帝都の生活が平時と変わらないこと)が起こるのは、単にサンクトペテルブルク(引用者注:1915年当時はペトログラード)が戦場から遠く離れているからにすぎない、モギリョフ(引用者注:当時はロシア領、現ベラルーシ東部の都市、マヒリョウ)へ行ってみるといいでしょうと反論すると、彼(引用者注:大庭柯公)は、モギリョフに行ったが、そこでサンクトペテルブルクと違う暮らしは見受けられませんでしたと私に答えた。

そこで私が彼に、モギリョフも実際は前線から遠く離れているから、ぜひワルシャワやリヴォフに行くべきですよと言うと、彼はまた私にこう言った。それらの都市にも行きましたが、そこでも生活の仕方に戦争の影響はまったくありませんでした、帝都と同じように人々は踊ったり、娯楽にふけったりしていたのです、と<sup>47</sup>。

大庭は東部戦線に従軍した結果、地方都市や前線の都市の生活も帝都と同様に平時とほとんど変わっていないと認識し、ロシア社会が戦争を深刻に捉えていないと考えていた。大庭が残したラヴァ・ルスカの取材記録もそのような考察を象徴するものである。特に同地の野戦病院を詳しく観察し、以下のように記した。

天幕は孰れも三十の寝台を据付け、中央に暖炉の備へあり。各斜面には可なり大形の硝子窓を約半間毎に穿ちあれば、光線は比較的十分なり。其他寝台ねだいの一樣なる毛布、枕、附属必要品の孰れも一定の品なるは、如何に露軍の衛生隊に関する準備が、平時より整頓しありたるかを察するに足る。負傷兵に至りては、軽傷重傷雜然として収容せられあるは、第一線に於ける仮収容所の常として、亦已むを得ざるなり。その被収容者が単に露兵に限りて、亦一人の敵の負傷兵を見ざるより推せば、恐らくは敵の負傷兵は戦線より直に後方の病院に後送せらるゝものなるべし<sup>48</sup>。(傍線部引用者)

大庭の記述は先に検討したテキストの中ではスィロミャートニコフのものに近く、野戦病院が比較的快適に整えられ、十全に機能していることを評価している。また負傷兵に対する印象はクラフチェ

ンコの描写や考察とはやや異なり、傍線部のように戦時下の前線という状況を考慮したため、収容所や野戦病院への収容に対する糾弾はうかがえない。これは大庭が1904年、日露戦争にロシア語通訳として従軍した経験に基づく判断であったと推測される。ペアズやシュームスキーはラヴァ・ルスカの戦闘について記述したが、大庭はわずかに「翌朝は馬車を駆りて、此地附近の激戦の跡を見る。非専門家たる予等の眼には、別段の変りをすら認めず<sup>49</sup>」とごく簡潔に同地の戦跡に言及するに留まり、ネミローヴィチ=ダンチェンコのように戦死者や激戦に思いを馳せることもない。大庭の従軍記では、ペアズやロシア人記者たちの従軍ルポルターージュに比べて、戦況や戦術など戦争自体に対する専門的な考察や言及、あるいは叙情的な述懐があまり見られないのである。その一方で大庭は自らの実体験を以てロシアの人々の日本に対する親近感を示す逸話をいくつも披露する。その一つとして、ロシア兵の間で日本軍がロシアを援護するために参戦するという風説が出回っており、ラヴァ・ルスカで大庭があるロシア兵にそのことについて声をかけられたという出来事が挙げられる。

49 同上、141頁。

50 同上、133-135頁。

次に驚くべき勢を以て、露軍一般大尉階級より下士卒の間に伝はり、且確信せられつゝある風説は日本砲兵の重砲と共に露軍に來援しある一事是れなり。(中略)かゝる質問は其幾度たるを記せざるも最も予が記憶に存するはラワ、ルスカ(ガリシア)に於る一夕、薄暮の街を予が飄君(引用者注：ロシア人従軍記者のフォードロフ)と散策しつゝありたる際、町の四辻を足早に他方へ行過ぎんとせる一露兵の、不凶予が他の一角を曲り過ぎんとするを見るや、忽ち此方こなたに走り来り飾りなき言葉にて「日本の君、日本の重砲を此方面に持来りて一刻も早くプゼミスルの要塞を吾等のために落し呉れ給へ」と言ひて立去りぬ。(中略)彼等が忙しき炊事時刻たそがれどきの誰彼時に、日本人の身边に馳せ寄りて、不落の要塞を日本の重砲の兵火に信頼して之が陥落を期せんとする心情は、無邪気にして亦可愛きに非ずや<sup>50</sup>。

このロシア兵は、おそらく初めて出会ったであろう日本人の大庭に対して、少しもためらうことなく朴訥としながらも、きわめて率直な言葉で日本に対する好意と信頼を披露している。大庭は彼の心情を「無邪気」で「可愛き」と評し、日本の読者に対してロシア人への親近感や好感を訴えるのである。このようにして当時のロシアの人々が日本に対して抱く親近感や好印象をできる限り彼らの肉声を交えながら伝えた。さらに大庭はラヴァ・ルスカの仮設病院でロシア軍の医師や看護婦、僧官らから日本に関する質問を一手に引き受

51 同上、140-141頁。

52 中山前掲書、109頁。

53 大庭前掲書、17-18頁。

け、名刺に日本語の文字を記して記念に彼らに渡すなど<sup>51</sup>、ロシアの従軍記者や兵士、住民たちに対し、日本の代表者として絶えず日本の存在を訴えた。大庭の従軍ルポルタージュに関する先行研究では「現地の人間の、生の声が引用されることが少な」く、「刺激的な単語の数々」によって「高揚した「戦時気分」へと接続されていく<sup>52</sup>」と特徴づけられている。しかしこれまでに引用した大庭のテキストから明らかである通り、それは「戦記」や「軍記物」とも称されるべき従軍ルポルタージュを執筆するにあたって彼が敢えて採用した文体、すなわち当時の新聞界でまだ広く用いられ、漢語や漢文由来の表現を多く用いることでより重厚な描写を可能とする明治普通文に起因するものであり、大庭が従軍記を記した目的は日本の読者の「戦時気分」を高揚することではなかったと考えられる。実は大庭は自身の従軍記の特徴を、予め読者に対して明らかにしている。

予の従軍記は従軍記にして感想記たるべく又観光記たるべし而かも予は到る処に天真爛漫たる露軍の将卒及露国国民の熱情ある歓迎の中心となり彼等が予を通じて我國民と日本軍將卒とに衷心よりする敬意を表せんとするの实情を十分に我読者諸君に伝へんことこそ予が本記事に於ける重大なる使命なれ<sup>53</sup>。(傍線部引用者)

先に考察したように、大庭が軍事については「非専門家」であると自覚的であった上、ロシア帝国による従軍記者への取材範囲の制限をある程度認識していたことを考慮すれば、自身の従軍記が戦況の分析や軍事情報を含んだ従軍記録としては未成熟なものに終わることを当初から予想していたと考えられる。大庭は従軍記の中で自らに可能な範囲で東部戦線の戦況や戦跡に関する報告を試みながらも、当時のロシア帝国領の地理や歴史、名所案内を含むあらゆるロシア事情を考察し、日本の読者に向けて解説することに注力した。自らが文献を通じて蓄積してきた知識や情報に、従軍を通じて自らの体験や見聞、そしてロシア兵や住民たちとの些細な接触や交流に対する印象や考察を巧みに複合させることで、ロシア人の気質や民族性を把握し、自らのロシア事情の研究に応用しようとしたのである。このように書き手の実体験や経験に基づき、ロシア人の気質や民族性を分析し理解するという研究は、前述の通り、19世紀後半から20世紀初頭の欧米におけるロシア研究の大きな一つの潮流として確かに存在していた。大庭もそれを強く意識し、それを自らの従軍ルポルタージュの中で実践しようとしていたといえよう。大庭のロシア特派とロシア軍従軍における取材や調査研究の関心は、本来は従軍記者として最優先すべきである職務、すなわち最新の戦況

や軍事情報の収集と伝達・通信を大きく超越していた。大庭の従軍ルポルタージュは、確かにペアズやロシア人記者たちの従軍ルポルタージュと比較すると、戦況そのものや軍事的な専門性の高い情報がきわめて乏しかったことは否めない。しかしそれは、ロシア軍従軍を通じて「従軍記者」、「日本の代表者」、「ロシア研究者」という大庭の三つの立場が絶えず揺れ、せめぎ合った結果が反映された著作であったのである。

大庭柯公は第一次世界大戦の東部戦線従軍で、実はイギリスを代表するロシア研究者、バーナード・ペアズに出会っていた。ペアズは自らのロシア研究で培ったロシア語の運用能力やロシア関係の人脈、ロシア事情の知識を活用しながら、あくまで従軍記者として責務を果たし、イギリスで東部戦線を克明に記録した良質な従軍ルポルタージュを出版した。その後もロシア史の研究書やロシアにまつわる回想記を出版するなどイギリスのロシア研究をリードし続ける。一方の大庭は従軍体験を経て、歴史や地理学を基礎とした政治や社会問題、文学・文化など広汎な分野にまたがる地域研究ともいうべきロシア研究に深く関わることになった。大庭の『露西亜の戦線より』は、同時代のイギリスをはじめとする国際的なロシア研究の系譜と潮流の中に位置した、日本における本格的なロシア研究書の萌芽であったといえる。日英のロシア研究者の東の間の交差は、大庭のロシア研究に直接活かされることはなかったが、その後の両国のロシア研究の分水嶺ともいうべききわめて重大な事実である。

日露戦争後から第一次世界大戦勃発の間に、すでに三度にわたる日露協約が両国間で締結され、後藤新平ら政財界の有力者や政治団体が中心となって日露協会(1907-1917)を発足させるなど、国家・政治レベルで日露の友好や両国間の人的交流の活性化を目指す動向があったが、それは満洲や韓国、モンゴルにおける権益の維持や分割など利害の調整と一致を背景に成立し、いわば帝国主義的な性格を持っていた。このような状況下で、大庭は一介の外国特派記者・従軍記者でありながら、可能な限り国家の利害に左右されずに真の日露の相互理解と両国の友好を志すロシア研究者という立場から、日本の知識人や一般大衆に向けてロシア事情やロシアの国民性を解説する。一方で同盟国のロシアや西欧諸国の従軍記者たち、ロシア軍の兵士や住民たちに日本の存在を宣伝した。政治や外交のレベルでの「日露友好」の時代に、一般庶民のレベルから日本社会のロシアへの心理的距離を縮めようと試みたのである。大庭は第一次世界大戦期にロシア帝国とそこに生きる人々の生活の実態を観察した。この時、彼が青年期から蓄積してきた膨大かつ広範なロシア事情の知識に初めて実体験が伴い、1915年刊行の『露西亜の戦線よ

り』、さらに1917年に出版された代表的著作『露西亜に遊びて』へ結実した。大庭のロシア研究は政治・社会事情や文化研究、歴史、民族学など幅広い分野に互る総体的なものであり、かつ臨場感と説得力を持ちつつ、同時に文学テキストとしても優れていた。第一次世界大戦は、大庭柯公がそれ以降一層成熟したロシア研究者として活躍するにあたり、大きな転機となったのである。

(附記)

本論は、日本学術振興会科学研究費助成事業(特別研究員奨励費研究課題番号 14J00269)による研究成果の一部である。